

# 幼児期における鑑賞教育の必要性

一日米の美術館教育普及プログラムの比較から

林 有 維

## 1. はじめに

本稿は、美術館の社会的使命の要とされる教育普及の問題について、低年齢期の子ども（主に未就学児～小学校中学年迄）に関する鑑賞プログラムについて提言することを目的とする。

日本において、若い子どもが美術館で楽しむ風景は、欧米と比較して遭遇率が少ないように思われる。その原因として、幼児期の作品鑑賞プログラムの不足（制作ワークショップが多い）が挙げられる他、親世代自身が美術館を活用する経験が欠しいこともある。育児世代の美術館と博物館の利用に関するアンケートの結果を見ると、博物館は「たまに行く」と答えた層が55.6%だったのに対し、美術館には「あまり足を運んでいない」と回答した層が6割近くを占めている<sup>1</sup>。また、美術館に足を運ばない理由として、「行きたくても子ども連れでは自分がゆっくり鑑賞できない」「子どもが楽しめない」という意見が4割を占めている。博物館に足を運ばない理由の上位が「行きたくても行く時間がない」であることを比較すると、美術館における子連れ鑑賞の難しさを物語る結果となっている<sup>2</sup>。

特にアメリカにおいては、公共機関である学校と美術館が連携した教育プログラムが長期に渡って実施され<sup>3</sup>、知識だけでなく、認知能力・問題解決能力向上の効果について研究で明らかにされつつある<sup>4</sup>。日本においても教育普及の研究が蓄積され、子ども向けの作品鑑賞プログラムに取り組んでいるが、資料1の「2015年度 国内の美術館子ども向け鑑賞教育普及プログラム事例」を見ても明らかなように、低年齢期からのプログラムは少ない。アメリカでの取り組みのメリットを考えると、低年齢からアートと接し鑑賞体験をすることは、情操教育の一環にとどまらない認知思考能力を育む可能性があると考えられないだろうか。

本論では、主にアメリカと比較し、日本の幼児期鑑賞プログラムの不足点を見出し、新たな親子参加型作品鑑賞プログラムを開発・実践した結果について述べる<sup>5</sup>。

## 2. 先行研究等

美術館教育普及活動については、日本においても研究と実践活動が蓄積されている。特に鑑賞教育に関して、1996年に来日したアメリカ・アレナス<sup>6</sup>の対話型ギャラリートークの影響力は大きく、現在も根強いと言える。またフィリップ・ヤノウィンが開発したVTS（Visual Thinking Strategies）<sup>7</sup>の概念と手法が日本に与えている影響も重要である。近年は更に研究が進み、対話型鑑賞法における人材育成に関する問題、手法に関する問題について詳細な議論が行われており、日本独自の取り組みも生まれてきている。

上野は対話型鑑賞の日本における受容過程について、鑑賞理念、学習理論や学習指導要領との関連から分析を行い、日本独自の美術鑑賞の理念や実践が生まれた経緯について考察している<sup>8</sup>。

吉田は対話型ギャラリートークの日本への紹介・移入の時期に、対話型ギャラリートークへの学校教育への導入・応用が始まった点に触れている<sup>9</sup>。吉田はアレナスの手法を評価しつつも、拡大・普及をはかる場合には進行役本人の知識と解釈が大切になることに注意を促している。長井は、対話型鑑賞の手法を評価しながら、「対話型鑑賞自体を目的化することを避けるためにも、到達すべきモデルについての議論を今一度行う必要があるのではないか。」<sup>10</sup>と提言し、テート・モダン（イギリス）におけるテーマ別作品鑑賞の有効性について分析を行っている。この手法はアカデミックなテーマ分けとは異なり（例えば「歴史画」「肖像画」）、「Nude/ Action/ Body」といった分類法がされており、概念そのものを自分と身近なテーマから作品とリンクさせて思考を深めていく方法がとられており、興味深い。

一條と寺島の調査報告<sup>11</sup>では、日本の鑑賞教育活動に影響を与えてきた米国の美術館のスクールプログラムに関してまとめられている。結論としては、米国の鑑賞教育においては、関係者の間で鑑賞教育の概念が共有されており、専門的な研修を経て人材が育成され、組織として体制が保持されている点が述べられている。日本における鑑賞教育も需要が増えてきているが、学校と美術館の双方向的な対応や、指針や方法論の共有までは困難なこともあり、課題がある点がこの考察から読み取れる。

大高は、米国の美術館教育の哲学的原理の潮流を再考する中で<sup>12</sup>、「教授法は、3つの哲学的原理のいずれにおいても、〔学習者主体〕の〔実物に基づく〕〔探求〕を指向するものへと変化してきているといえよう。」<sup>13</sup>とまとめている。その指向は、米国における歴史の中で、美術館が、多様な人種と社会層の人々への関わりを常に考え、「社会変革への視座がその根底に常に存在してきた」<sup>14</sup>点から育まれていると考えられる。日本の社会的文脈とは異なる環境の鑑賞方法をそのまま取り入れることは困難だが、「学習者主体」の「実物に基づく」「探求」を指向する方法論は、多文化共生が標準となる国際社会において必要ではないだろうか。

実際の日本の鑑賞教育の現場に関する研究としては、佐野が鑑賞教育の現状と課題についてまとめ、対話型鑑賞法を生かす教材化について提案をおこなっている。「…鑑賞教育の現状を把握した結果、美術教育の質的保証に対する不安、美術教育の質的保証に対する不安、美術教育のアカウントビリティーの不足、鑑賞教育の意義、目的・内容・対象等の理解不足…（後略）の問題などが浮き彫りにされた。」<sup>15</sup>つまり、日本の鑑賞教育の現場においては、教員が対処することが求められており、その育成が追いついていない現状が浮き彫りにされている。

ファシリテーター（進行役）の不足や教員への研修が追いつかない現状に対し、鑑賞教室を促進する団体が美術館外、もしくは美術館と連携して活動を始めている。京都造形芸術大学では、2004年の早期から福のり子がACOP（Art Communication Project）を立ち上げ、授業で学生がファシリテーターを務めて学ぶ取り組みを行っている。関東では、NPO法人ALDA（芸術資源開発機構）がコーディネーターを派遣する形で、西東京市の小学校等と連携して鑑賞授業を進め始めている。また、東京都美術館と東京藝術大学が中心となって、「Museum Start あいうえの」というプログラムを2013年からスタートしており、ファシリテーター養成や、鑑賞授業、様々な企画（コンサート、紙芝居など）を行い、鑑賞教育の幅を広げている<sup>16</sup>。美術作品鑑賞の機会は広がっているように考えられるが、アメリカと比較しての現状について、次の節で見えていく。

### 3. 日本の鑑賞プログラムの不足点—海外の事例との比較から—

日本の現状の一例としては、国立西洋美術館、横浜美術館や、国立近代美術館（工芸館）<sup>17</sup>などの美術館で子ども向けの教育普及が盛んに行われている（資料1「2015年度首都圏の子ども向け美術館教育普及

プログラム事例参照)。しかし、鑑賞教育に関しては主に小学生中学年からの応募となる場合が多く、未就学児と小学校低学年までは参加しにくい現状がある。

例えばニューヨーク近代美術館（以下モマと略す）のプログラムを見ると（資料2「2015年度 海外の美術館子ども向け教育普及プログラム事例—鑑賞を中心に—」を参照）、4才以上のプログラムが2つ設定され、予約不要で月に4回から9回開催されている。日本国内のプログラムを抽出して調査したところ（資料1参照）、事前申込制や抽選で人数が制限され、開催回数が少ない。また、未就学児へのプログラムが少ないことは明らかである。予約不要のプログラムは、例えば国立西洋美術館では、ファミリープログラム／びじゅつーる（大人と子どもが一緒に楽しむために作られたツールの貸出し）など、ツールの貸出や、東京国立近代美術館のセルフガイドなど、参加者が自主的に取り組む物が多い。

アメリカと比較して、教育普及の組織が小さく予算も限られている日本の現状では、スタッフとボランティアの活動によって主に支えられている場合が多いが、アメリカの美術館スクールプログラムの調査においては、プログラム対応スタッフは有償の契約エデュケーターの存在がある<sup>18</sup>。ドーセント（ボランティアスタッフ）にも高度なスキルが求められ、厳しい研修が課せられる。吉田貴富は、日本においても、対話型鑑賞に対応できる適切な知識・理解・解釈を具えたファシリテーターの育成が、今後の美術教育普及における重要なポイントになること述べている<sup>19</sup>。

鑑賞ツアーの対象年齢を見ると、モマは4才以上、メトロポリタンは3才以上（読み聞かせは18ヶ月から）、グッゲンハイム美術館は3才からとなっており、早期の取り組みがされていることがわかる。予約不要のプログラムが多く、開催数も多い。モマでは、家族向けギャラリートーク2種類が月に4回～9回行われており、常時無料貸し出しされるキッズ用のオーディオガイドには、9ヶ国語の翻訳も用意されている。メトロポリタン・ミュージアムでは18ヶ月から図書室での絵本の読み聞かせが始まり、その後家族で館内を回ることが推奨されている。他に子ども向けクラスでは、年齢別、種類別に全7コースが用意されており、鑑賞と制作活動がリンクするプログラムが企画されている。グッゲンハイムでは、「ベビーカーツアー」が行われており、月1回のプログラムだが、すぐ満席となる人気のツアーとなっている<sup>20</sup>。つまり、低年齢期から親子向けのプログラムが用意され、美術館にアクセスしやすい状況が存在し、就学時に学校教育と連動した教育がより効果を上げるという図式が成り立っている可能性がある。また、イギリスのテート・モダンにおいては、HP上でのゲームやビデオ鑑賞などのプログラムが充実しており、美術館への来館と連動して楽しめる仕組みが作られている。教員向けプログラムとしては、児童の年齢別（KS1-4-7才、KS2-7-11才、KS3-11-12才）に作成されたワークシートのダウンロードが可能であり、質問事項や目的などの解説がされている<sup>21</sup>。テートでのプログラムは、アメリカの対話型鑑賞とは異なる独自の発展をとげており、4つの別個の枠組みを通して、作品解釈生成の基盤を提示している点が興味深い<sup>22</sup>。VTSと同様、構成主義的学習理論の原理から構成されているが、具体的なキー・クエスチョンが設定されており、質疑応答の中でアートに関する知識が蓄積するような仕組みが構成されている。

日本では、国立近代美術館の「おやかでトーク」が低年齢の4才からとなっているが、開催回数が限られている。日本において子ども向け鑑賞教育として主流なのは、学校教育の一環としての鑑賞授業であり、低年齢や家族向けのプログラムは海外に比べて少ない現状といえる。また、そもそも美術館への子連れ層のアクセスが少ないことから、プログラムそのものの存在を知る機会が少ないことも、輪が広がりにくい原因とも考えられる<sup>23</sup>。小学生の保護者に、ここ1～2年で子どもと美術館に足を運んだか尋ねた調査<sup>24</sup>では、6割の保護者が1回も行かなかったと答えている。興味があっても子連れでは行きにくいという回答も多く、美術館そのものが子連れを歓迎していないイメージがあると考えられる。「1回も行かな

かった」という人の理由は大きく3つ挙げられるが、「子どもと一緒にいきたいと思う美術館がわからない」(41.9パーセント)という回答は、逆に情報があれば潜在的なニーズを引き出せる可能性を提示していると言える。アメリカの美術館のように親子一緒に楽しめるプログラムが、予約制ではなく豊富に用意されていれば、構えずに訪れることができ、次回も訪れたいと考える親子が増えるのではないだろうか。

### 3. ミュージアム・ツアー実践と反応

この節では「子どもと美術館」主宰のミュージアム・ツアーにおける実践例を挙げる。「子どもと美術館」では、低年齢期の子どもと保護者を対象にしたプログラムが少ない現状をフォローするために、独自のツアーを行っている<sup>25</sup>。このツアーでは美術館に限らず、ギャラリーなど様々な生きたアートのスポットで対話型鑑賞を実践し、鑑賞教育の導入を行うことを目的としている。本稿執筆者<sup>26</sup>は団体主宰者であり、西洋美術史の研究者であった経験から、美術史の知識を基にワークシート（子ども向け、保護者向けの2種類）を作成し、VTSやテート・ギャラリーの手法などを参考にしてプログラムを構成している<sup>27</sup>。

本稿では、国立西洋美術館常設展におけるツアーと、Bunkamuraギャラリーにおける室麻衣子展におけるツアーと比較対照し、美術館内外での子どもの反応の相違についても触れていく。場所、対象、対象と作品、設問、狙い、子どもたちの反応についてまとめた。

#### 【国立西洋美術館ミュージアム・ツアー 常設展】

- ・所要時間 10時半～11時半 約1時間。
- ・対象：3家族8名（構成：母親と小学1年生女子、両親と5歳女子、2歳男子、母親と小学2年生男子）。
- ・対象作品：オーギュスト・ロダン、《考える人》(拡大作)、1881年-82年（原型）、1902-03（拡大）、1926年（鋳造）、コルネリス・ド・ヘーム《果物籠のある静物》(1654年頃)。
- ・問題：①「考える人は世界に何体ぐらいあるか。」②「考える人は何を考えていると思うか。」③「西洋美術館の庭園にもう一人考える人がいるので、探してみましょう。」
- ・回答：①生前鋳造は21体と言われている。 ②自由回答 ③《地獄の門》の上部部分
- ・狙い：①彫刻とは何か、彫刻におけるオリジナルの問題について考える設問。法的には12体までがオリジナルと考えられているが、生前鋳造はこの範疇に留まらない。また、原型は70センチであり、拡大作は職人によって作成している点にも触れ、彫刻作品の多様性について考える導入とした。②彫刻の表現を自分の言葉で表すための設問。保護者には1888年にコペンハーゲンで《詩人》<sup>28</sup>をいう作品名で公開されていて、《考える人》という名は、後年付けられた名前であることを説明し、タイトルに対する固定観念について考えてもらう機会とした。③観察力を養うための設問。同じ庭園内にある《地獄の門》ティンパナム中央に置かれている。《考える人》は、地獄の門の構想の一部であることを視覚的に理解してもらう。
- ・反応：《考える人》を既にどこかで見たことのある児童が多く、導入に適した作品。実際に《考える人》を同じポーズをし、その姿勢の辛さや体の強張る感じを体感することで、彫刻作品の身体表現を考えることができた。《地獄の門》を見つけるには歩き回り、同じ庭園内にある彫刻作品を見て比較する機会を持つことができた。地獄の門についてどう感じるか、それぞれが考え発言を行った。

彫刻作品を鑑賞した後、館内の常設展に移動し、コルネリス・ド・ヘーム《果物籠のある静物》(1654年頃)の鑑賞を行った。テートの手法の一つである、「メモリー・ゲーム」<sup>29</sup>を活用し、作中に描かれている物を具体的に言葉に置き換える取り組みを行った。小学生2名はキリスト教を主題とした作品に興味を持ち、5歳女子は装飾品や静物画、モダン・アートにも興味を示していた。2歳男児は館内の彫刻に興味を持ち、

自分の身体で形の真似を主体的に行っていた。このツアーでは、狙いを明確にした設問を最初にこなすことで、作品の鑑賞方法の概要をとらえ、主体的な鑑賞へスムーズに入ることが可能となったと思われる。

#### 【Bunkamura Gallery ツアー 室麻衣子個展<sup>30</sup>】

- ・所要時間：14時～15時 約1時間。
- ・対象：3家族8名（構成：母親と5歳女子、叔父・叔母・父親と8歳女子、母親と7歳男子）。
- ・対象とした作品：室麻衣子個展ギャラリー内全ての作品。
- ・問題：①アーティストがいたことのある国はどこか。 ②一番好きな作品とその理由。 ③アーティストへ直接質問したいこと。④⑤⑥作品を当てるクイズ。キーワードを与え、ギャラリー内からその作品を選ぶ。
- ・回答と狙い：①メキシコ。アーティストが影響を受けた国を想像し、表現の原点を考えるため。②③プレゼンテーションの場を設け、自分の考えを明確に伝える目的の設問。④⑤⑥はキーワードから作品の主題を推測し、作品を詳細に観察する時間を持つ狙いがあった。
- ・反応：ギャラリーと美術館の明確な違いは、実際のアーティストに会える点と、作品に価格が付いている点であった。各自の好きな作品を丁寧に選び、小学生はその理由を説明することができた。（色合い、葉や鳥が丁寧に描かれている、金箔が光に反射して輝いている等。）作品当てクイズは、キーワードに当てはまる作品を答えとして用意していたが、本人の観察から違う作品を選びだすこともあり、観察力の鋭さが見られた。最後にアーティスト本人に登場してもらい、質問タイムとなった。「どうして動物が靴を履いているのですか？」「ゴールデンツリー（金箔）とシルバーツリー（銀箔）があるのはなぜですか？」など、素材や表現に関する積極的な質問が飛びかった。作品鑑賞にとどまらず、実際のアーティストと接することで作品を身近に捉える事のできる機会となった。

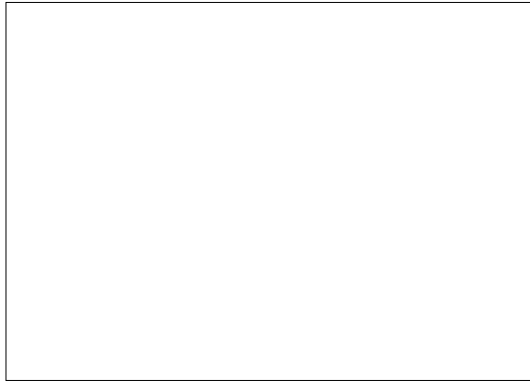
以上がツアーの内容となるが、今後は保護者のアンケート分析結果やプログラムの内容をより精査して行い、効果や需要を分析する予定である。

## 4. まとめにかえて

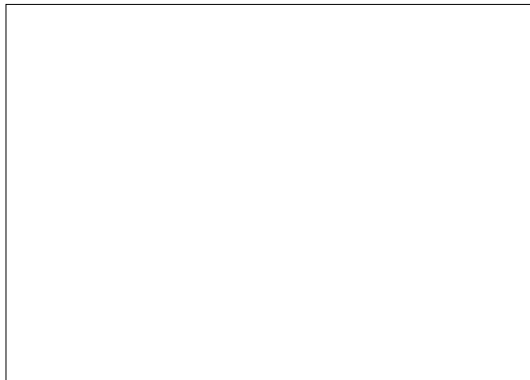
以上本稿では、日米の美術館教育普及プログラムの比較を行うことで、日本の子ども向け鑑賞教育の不足と必要性について述べてきた。日米では、歴史的背景は異なるものの、博物館（博物館法では美術館も含む）が教育的役割を負っていることには変わりはない。平成20年度には、博物館に対する需要の高度化・多様化に対応するために、博物館法の基準改正が行われた<sup>31</sup>。教育については、「利用者等が学習成果を生かすことができる活動機会の提供」することが挙げられ、整備と充実が進められる予定である。学芸員資格認定のために大学で履修する教科においても、教育学概論を廃止し、博物館教育論を新設することとなったため、人材育成の促進が図られるであろう。現状では、博物館の館種別割合からすると、美術館は全体の19パーセント、科学博物館は8パーセントを占める<sup>32</sup>。平成19年度の来館者数は美術館が約60万人、科学博物館は約40万人<sup>33</sup>と、パーセンテージの割合からすると美術館への来館者数は多いとは言えない。利用者数だけで判断することはできないが、戦略的に子どもへのプログラムを増やし、家族での来館者数を増やすことで結果的に利用者数を増やすことが可能ではないだろうか。「子どもと美術館」では、今後も定期的にミュージアム・ツアーを行い、親子連れ鑑賞の手助けをすることで、潜在的なニーズを引き出す。今後は、アメリカだけではなく、ヨーロッパの鑑賞教育についても調査・比較し、日本の鑑賞教育に必要な点を詳細に分析し、ミュージアム・ツアーに取り入れていく予定である。

### 【謝辞】

ツアーにご協力いただいたアーティストの室麻衣子氏、岡本太郎美術館の木下紗耶子氏、ご参加いただいた皆さまに感謝致します。



(図版1)「室麻衣子 個展March in March 3月の行進」Bunkamuraギャラリーにて、アーティストと撮影。



(図版2)「室麻衣子 個展March in March 3月の行進」Bunkamuraギャラリーにて、参加者一同で撮影。

### 註

\* 主要参考文献は註に含む。

- 1 的場康子「育児世代の美術館・博物館の利用実態」『Life Design Report 2006年 11月-12月号』、第一生命経済研究所、2006年、pp. 4-15.
- 2 *Ibid.*, p.10.
- 3 一條彰子、寺島洋子「米国の美術館における鑑賞教育：所蔵作品を活かしたスクールプログラムの調査結果に基づく一考察」『日本美術教育研究論集』日本美術教育連合、No47、2014年、pp. 1-12.
- 4 *Ibid.*, p.2. 教育プログラムの成果の検証のため、政府の補助金を得て評価研究が行われている点について触れている。ランディ・コーン社による評価は以下のサイト参照。[http://www.randikorn.com/resources/problem\\_solving.php](http://www.randikorn.com/resources/problem_solving.php) (2015年9月28日検索。)
- 5 幼児期とは、本稿では2才から8才位までを指す。
- 6 『なぜ、これがアートなの?』アメリア・アレナス、福のり子訳、淡交社、1998年。アレナスの著書、教師向

け鑑賞教育ビデオ教材など多数あり。

- 7 フィリップ・ヤノウィン『どこからそう思う?学力をのばす美術鑑賞：ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳、淡交社、2015年。
- 8 上野行一「対話による美術鑑賞教育の日本における受容について」『帝京科学大学紀要 8』帝京科学大学、2012年、pp.79-86.
- 9 吉田貴富「対話的ギャラリートーク方鑑賞指導における進行役の要件について」『美術科教育学会誌 (30)』、美術科教育学会、2009年、pp.439-452.
- 10 長井理佐「対話型鑑賞の再構築」『美術科教育学会誌 (30)』、美術科教育学会、2009年、pp.265-275.
- 11 一條彰子、寺島洋子、前掲論文
- 12 米国における美術館教育の歴史については、以下の論文を参照。大高幸「米国における美術館教育の潮流から学ぶ」、『日本美術教育研究論集』No47、日本美術教育連合、2014年、pp.13-24.
- 13 *Ibid.*, p.21.
- 14 *Ibid.*, p.21
- 15 佐野真知子「美術鑑賞教育の実践的課題と教材化の視点—対話型鑑賞法を生かした鑑賞学習を探る」学位論文内容の要旨教科・領域教育学専攻芸術系コース美術、兵庫教育大学、2010年、p.402-3.兵庫教育大学学術情報リポジトリ HEARTより検索。 <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/handle/10132/6184> (2015年9月28日検索)
- 16 プログラムによっては、家族で参加できる。ミュージアムスタートバック（オリジナルワークブック、バッグ、バッジなど）が無料で配布され、上野の文化施設9館を楽しく回る仕組みが作られている。
- 17 実際に工芸作品をさわる取り組みが行われている。
- 18 一條彰子、寺島洋子、前掲論文、p.6.
- 19 吉田貴富「対話的ギャラリートーク型鑑賞指導における進行役の要件について」『美術教育学：美術科教育学会誌 (30)』、2009年、pp.439-452.
- 20 「2014年度美術科教育学会リサーチフォーラム コレクションと鑑賞教育—美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育の展開」において、シャロン・バツスキー（グッゲンハイム美術館教育部ディレクター）による講演「米国の美術館教育の現場から～普及活動の今日的展開～」があり、ベビーカートゥア紹介が行われた。日本では、ベビーカートゥアを杉浦幸子が行っている。(2014年度：東京都現代美術館、2015年度：岡本太郎美術館にて。)
- 21 <http://kids.tate.org.uk/> (2015年9月28日検索)
- 22 ロンドン・テートギャラリー編『美術館活用術～鑑賞教育の手引き』、奥村高明＋長田謙一監訳、美術出版社、2012年。
- 23 的場康子「小学生の親の美術教育や美術館に対する意識」『Life Design Report 2007年 9月-10月号』、第一生命経済研究所、2007年、pp.16-27. 子連れの場合、美術館より博物館のほうが足を運ぶ人が多い。情報にアクセスする機会が少なくなる。
- 24 *Ibid.*, p19-20.
- 25 なお本研究者は西洋美術史の研究者としての知識を基盤に、現在は「子どもと美術館」という団体を主宰し、川崎市の岡本太郎美術館、国立新美術館など様々な場所で親子向けミュージアム・ツアーを開催している。子どもと美術館HP URL:<http://www7b.biglobe.ne.jp/~kotobi/>
- 26 2014年に同大学のアカデミック・プロダクション産学連携研究員を経て、2015年1月に任意団体「子どもと美術館」を設立。設立前に、NPO法人「芸術家と子どもたち」において2014年に半年間のインターンシップを行い、子ども向け教育普及事業の現場を学んだ。
- 27 これまで7回ツアーを行っているが、初回参加者への質問したところ、「今までこのようなツアーに参加したことがない」という回答が多くを占めている。
- 28 元々はこの人物は詩人ダンテとされている。次第に単独像として、広く「思惟」する人、「無名の創造者」として、普遍的な意味での「考える人」となっていた。

- 『国立西洋美術館名作選』,西洋美術振興財団、2013年、p.206.
- 29 ロンドン・テートギャラリー編、前掲書、p.94.
- 30 「室麻衣子個展March in March 3月の行進」2015/3/11(水)～3/18(水) Bunkamuraギャラリーにて開催。メキシコでアートを学び、立体や平面、アニメーションなどを手がける。メキシコのアマテ紙に金箔や銀箔などの素材も使い、カラフルな色彩で動植物を描いている。
- 31 パンフレット「博物館 これからの博物館」、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、2012年、pp.21-22.
- 32 *Ibid.*, p.21.
- 33 *Ibid.*, p.22.



資料1 2015年度 国内の美術館子ども向け鑑賞教育普及プログラム事例 (2015年9月28日現在) 作成: 林 有維

美術館名	プログラム名	対象年齢	内容	申込方法	開催状況	参加人数	費用
国立西洋美術館	ファミリアプログラム／びじゅつー	6才～10才の子どもと大人同伴	常設展の作品、大人と子どもが一緒に楽しむために作られたツールの貸出し	予約不要	8月/3日間(2015年度は貸出し終了)		無料
	ファミリアプログラム／どようびじゅつ	6才～10才の子どもと大人同伴	鑑賞と体験型がセットになったプログラム	事前予約	月/2回	15名(大人含めて)	無料
	ファン・デー	対象制限なし	・セイビぬりえ、びじゅつーの貸出し(子どもに限らず)、パスルを体験できる ・チャラリートーク、建築体験ツアーなど。	予約不要	年/2日		無料
	ジュニア・パスポート	小・中学生	子ども向け展覧会解説パンフレット	予約不要	企画展ごと		無料
東京国立近代美術館・工芸館(北の丸公園)・フィルムセンター(京橋)	KIDS★MOMAT	小学1年生～4年生(小5以上のプログラムもあり)	ギャラリートークや館内散策で美術館に親しむプログラム	事前申込、抽選	企画展ごと 3回(夏季)	30名	無料
	MOMATコレクション ションコード もセルフガイド	中学生以下	絵や彫刻をよくみるためのヒントが記された書き込み式のガイド	予約不要	展示替えごと		無料
東京国立近代美術館	MOMATコレクション 『セルフガイドブック』『みつけてピンゴ』	4才～8才	子どもたちが、大人と一緒に美術館を楽しむためのツール	予約不要	展示替えごと		無料
	おやこでトーク	4才～小学校入学前	家族で参加する、小学校に上がる前の子どもに向けたチャラリートーク	事前申込、抽選	年数回	10組	無料
東京現代美術館	ギャラリークルーズ	小学4年～6年生	学芸員と一緒に様々なツールを使って体験的に現代美術家との共同制作により、現代美術への理解を深める	事前予約	不定期	10数名	無料
	ワークショップ	小学4年～6年生	作品鑑賞を行う	事前予約	不定期(夏季)	20名	プログラムによる
国立新美術館	夏休み子どもたんけんツアール2015～国立新美術館のひみつをさがそう!～	小学校3～6年生	一般には公開していない美術館のバックヤードを見学	事前予約		15名	無料
	ワークショップ	子ども～大人まで(企画によって設定が変動)	展覧会に合わせた多彩なプログラム	企画による	不定期	プログラムによる	プログラムによる
	ガイドブック 『アートのとびら』	子ども～大人まで	現代美術の動向や時代背景をやさしい言葉で解説しながら、作品や作家についての紹介(英文での解説あり)	展覧会ごと	展覧会ごと		無料
	ガイドブック 『ちいさなアーティスト・ファイル』	子ども～大人まで	出品作家とその作品の魅力がやさしい言葉でわかりやすく解説		「アーティスト・ファイル」現代の作家たち」展の開催ごと		無料
横浜美術館	ガイドブック 『てくてくマップ』	子ども向け	館内を歩きながら、美術館のことを楽しく知ることができきるガイドブック				無料
	子どものアトリエ	小学校6年生まで	・平日は横浜市内の教育機関と連携した団体プログラム、休日は親子や個人を対象とした造形や鑑賞のプログラムを実施 ・夏休み子どもフェスタでは、鑑賞プログラムを実施	フリーゾーンは予約不要 ワークショップ・講座は事前予約	常時	プログラムによる	プログラムによる
	子どものアトリエ 『わくわく1日鑑賞講座』	小学校1年～6年生 親子	企画展を親子で鑑賞する講座	事前予約、抽選	年/2回	15組	プログラムによる
	子どものアトリエ 『わくわく1日鑑賞講座』	小学校4～6年生	高学年を対象とした、鑑賞のために必要な練習をすすめる講座	事前予約、抽選	年/1回	10名	プログラムによる

本資料は、各館のウェブサイトおよび印刷物をもとに作成した。

資料 2 2015年度 海外の美術館子ども向け教育普及プログラム事例—鑑賞を中心に— (2015年9月28日現在)

美術館名	プログラム名	対象年齢	内容	申込方法	開催状況	費用・備考
ニューヨーク近代美術館 MoMA * 4-14才向けのプログラム	ファミリー・ギャラリー・トーク 「Tours for Fours - 4才のためのツアー」	4才以上	様々な作品を見て、意見を聞いてアイデアを分かち合うプログラム。毎月違うテーマで行う。 例)「頭からつま先まで：人の体」	予約不要	月/4回～9回	・2名、大人3名の家族連れまで無料。 一人大人が増えるたびに25ドルシニアは18ドル、学生は14ドル、メンハーは5ドルかかる ・通訳が必要な場合は2週間前までに連絡
	「A Closer Look for Kids - もっと近くで観察」	4才以上	近代の名作や、最新のワグナーアートを近くで見、議論や活動を行う。毎月違うテーマで行う。 例)「私達はどこにいるの？場所と空間」	予約不要	月/4回～9回	”
	「Tours for Tweens - 7才～12才のためのツアー」	7才～12才前後	常設展、特別展の作品を見て意見を交換し、熟考する。 例)「食べて、書いて、繰り返す：ウォーホルのスーパー」	事前予約 (10日前から)	月/2回～3回	不明
	アクティビティ・カード		鑑賞のヒントやが記載されており、ワークシート(クイズや絵を描く作業)も行えるカードとなっている。	予約不要		無料
	パスポート		書き込み式のワークシートになっており、各ページにスタンプを押し完成する。	予約不要		無料
	オーディオ・ガイド	5才以上	英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、韓国語、日本語、中国語のガイドが用意されている。HP上からも視聴することができる。	予約不要		無料 https://www.moma.org/explore/multimedia/audios/872/audios-modern-kids-all
	「Storytime in Nolen Library - 図書館での読み聞かせ」	18ヶ月～6才	図書室で絵本の読み聞かせをした後は、家族で美術館をまわって楽しむプログラム。	先着順	日/2回	18ヶ月から3才向けは毎週水曜日に実施
	「Children's Classes」		エデュケーターやアーティストと共に美術館(スタジオからギャラリー)で学ぶクラス。週末のクラスは8週に渡るプログラムがある。年齢別、種類別に全コースが用意されている。	事前予約	週末のクラスは8週に渡るプログラム 春と秋に募集	・製作コース8週間のプログラムでメンハーは280ドル、一般は380ドル。
	「Upcoming Start with Art at the Met/Start with Art and Music - ネットでアートを始める/アートと音楽と一緒に」	3才～6才	ストリーパーを楽しんだり、スケッチしたり、歌ったりする活動を行い、アート作品と結びつけていく。	予約不要	月/1回 (木曜第1週)	無料
	「School Break Program - 学校がお休みの日のプログラム」	3才～11才	学校が休みの日に、家族連れで楽しむプログラム。	予約不要	週/2～3日	無料
グッゲンハイム美術館 Solomon R. Guggenheim Museum	Kid's Q&A		子ども向けガイドブック			無料
	「SECOND SUNDAY FAMILY TOURS - 第2日曜日の家族ツアー」	5才以上	家族で会話しながら巡るツアー。	事前予約	月/1回 (第2日曜日)	20ドル(入館料込みで、大人2人、子ども4人まで) *ファミリーメンバーシップ会員(年間135ドル)は、様々なプログラムが無料で受けられる。
	「Family Tour and Studio Workshop - ファミリーツアーとスタジオワークショップ」	5才以上	館内のツアー終了後、スタジオで制作を行う。	事前予約	月/1回	30ドル(入館料込みで、大人2人、子ども4人まで)
	「Just Drop In! - ちよっと寄ってみよう!」	3才～10才	展覧会の見所とギャラリーでの活動を運動させるプロジェクト。	先着順	週/1回	入館料に含む
	「Weekly Open Studios for Families - 家族向け週末スタジオ」	5才以上	スタジオでの制作。	先着順	週/1回	入館料に含む
	「Family Activity Kiosk - キオスクファミリー アクティビティ」	4才以上	アクティビティブックの貸出し(ガイドブック、ゲーム、スケッチブック、色鉛筆など)		週/2回(土日)	入館料に含む
	「STROLLER TOURS - ベビーカーツアー」	乳幼児	ベビーカーに乗る赤ちゃんや家族向けのツアー。所要時間約1時間。	事前予約	月/1回	20ドル(入館料込み)
	「Art After School - 放課後のアート」	8才～11才	美術館ツアーだけでなく、幅広いアートの技術についても学ぶ。	事前予約	8回連続プログラム	300ドル(材料、軽食、ファミリーバス、アルバム料込み)
	「Midwinter Break Camp - 冬のキャンプ」	8才～11才	5日間を通じて、アーティストに学ぶ講座、常設展、企画展を見て、スタジオで様々な手段を使って芸術的表現にアプローズする。	事前予約	2月	500ドル(材料、軽食、ファミリーバス、アルバム料込み)

本資料は、各館のウェブサイトをもとに作成した